

宝生会 月並能

二〇一九年六月九日（日）

開演 十四時

開場 十三時十五分

於 宝生能楽堂

14:00

采女

シテ金森 秀祥

ワキ殿田 謙吉

ワキツレ大日方 寛

〃 御厨 誠吾

間 高澤 祐介

大鼓 佃 良勝

小鼓 大倉源次郎

笛 藤田朝太郎

能「采女」（うねめ）
奈良の春日大社を訪れた僧が、一人の女に会います。僧は女の持つ木の枝を不審に思つて問いかけますと、女は春日明神がここに勧請された頃は木が少なかったので、氏子の努力で植林して森となったことを語り、さらに帝の寵愛を受けた後、心変わりを恨んで猿沢の池に身を投げて死んだ采女のことを語ります。猿沢の池に僧を案内した女は弔いを頼むと水中に消え失せますが、その夜在りし日の姿で現れ、僧の弔いを喜び、舞を舞い、なおも弔い給えと言つて波に消えて行きます。

狂言「水汲」（みずくみ）

茶の湯に用いる清水を、遠い野中までやらされるのを拒んだ新発意（しんぱち・見習い僧）が、自分の代わりに水汲みに来た寺の門前のいちや（女性の名）のあとをつけ、清水のほとりで小歌まじりに求愛します。若い男女の愛情表現と中世歌謡の取合せが絶妙。大藏流は「御茶の水」という曲名で寺の住持が出て来て争いになるなど内容が変わります。

15:45

水汲

後見

宝生 和英

藤井 雅之

地謡

澤田 宏司

小倉伸二郎

小倉健太郎

山内 崇生

小倉 敏克

當山 孝道

前田 尚廣

朝倉 俊樹

三宅 右近

高澤 祐介

能「野守」（のもり）

羽黒山の山伏が奈良春日野に着くと、一人の老人に会います。山伏がそこにある池の名を尋ねると野守の鏡と答え、また真の鏡は鬼神の持つものであると言ひ、春日野の鬼が昼は人、夜は鬼となつて野を守つたことを語ります。さらに「はし鷹の野守の鏡：」の歌の元になつた謂れを語つた老人は、真の鏡を見せようと塚の中に消え失せます。深更になつて山伏が祈ると、鏡を持った鬼神が塚の中より現れ、森羅万象を鏡に映し出して見せ、大地を踏み破つて帰つて行きます。

16:20

野守

シテ佐野 登

ワキ則久 英志

大鼓 柿原 光博
小鼓 住駒 充彦
太鼓 吉谷 潔
笛 寺井久八郎

間 前田 晃一

次回予告

二〇一九年九月八日（日）
十四時始

江 口 小林 与志郎

橋 藤井 雅之

後見

辰巳満次郎

野月 聡

和久莊太郎

地謡

高橋 憲正

小林 晋也

水上 優

大友 順

今井 泰行

登坂 武雄

佐野 由於

高橋 亘

終演予定 十七時三十分頃